

はじめに：
ローマ市民権と拘留の背景



拘留の種類

1) 投獄

最も厳しい拘留は、ローマ採石場の牢獄に入れられることであった。囚人は手足を鎖で縛られ、夜は真っ暗な狭い牢獄に入れられた。

[i] Brian Rapske, "The Book of Acts, In 1st Century Setting, Paul in Roman Custody" Vol III , pg 24

2) 軍事的拘留

牢獄に入られるほど厳しくない状態が軍事的拘留であり、容疑者は軍に引き渡された。

[i] Rapske, pg 28 & F.H. Hitzig, "Custodia", PW, Vol 4, 1898

拘留の種類(続き)

3) 連帯保証人に預けられる

軍事的拘留より緩い措置であり、鎖を使用する場合と使用しない場合があった。拘留の場所は牢屋の内も外もあった。

[i] Rapske, pg 32 & Dig. 48.3.1

4) 条件付きの釈放

ローマの市民権

ローマの市民権は、社会的な階層を表わしていただけない。人生のあらゆる面に影響を及ぼす権利が、ローマ市民権には付随していた。

商売をすること、税金の支払い、法律に関すること、相続を決めることから日々の家庭生活まで様々な面に影響を及ぼしていた。何をするにもローマの市民権を取得している者と取得できずに服従する立場にいる者の社会的な地位と権利の違いが明らかであった。(W.E.ボール著書より)ⁱⁱ

- 「プロボコ」と言う言葉が刻まれたコイン

ⁱⁱ W E Ball, "St. Paul and the Roman law and Other Studies on the Origin of the Form of Doctrine" Edinburgh: T and T. Clark, 1901, pg 2

- 「ローマ市民権を有する者を縛ることは犯罪であり、鞭打ちすることは忌まわしい行為であり、殺すことは間違いなく殺人罪である。

十字架にかけるとは？ それは言葉で表現できないほど残忍な行為である。^[ii]

^[ii] Cicero, Verr. 2.5.170 (キケロ)

- 裁判所へ上訴することはお金がかかることだった。ローマ市民権を有する者も、ローマへの旅費や滞在費用は全て自己負担で支払わなければならなかった。裁判の日が決まるまで長い年月滞在する場合も同様である。場合によっては裁判費用も自己負担だった。裁判で証言する者の交通費や生活費なども自費でまかなわなければならなかった。^[iii]

^[iii] Ramsay, “St. Paul The Traveller and Roman Citizen”, Ch 8

使徒パウロの社会的地位

- 生まれ故郷のタルソは、都市として高い評価があったらしい。デイス・クリトモの著書によると、キリキア州の中で最も大規模で華やかな都市であった。^[1]

[1] Rapske, pg 74

- 家柄や出身に関しては申し分が無い。ベニヤミン族出身のイスラエル人であった。(フィリピ3:5、ローマ11:1、第二コリント11:22)
- 学歴も素晴らしい。使徒22:3によると当時律法の専門家として著名だったガマリエルのもとで教育を受けた。

パウロは社会的に尊敬されるような家庭環境で生まれ育ち、しかも、ローマの市民権を取得していたという、最高に恵まれた人物だった。

こうして、
わたしたちはローマに着いた。
クラス①: フィリピでの拘留

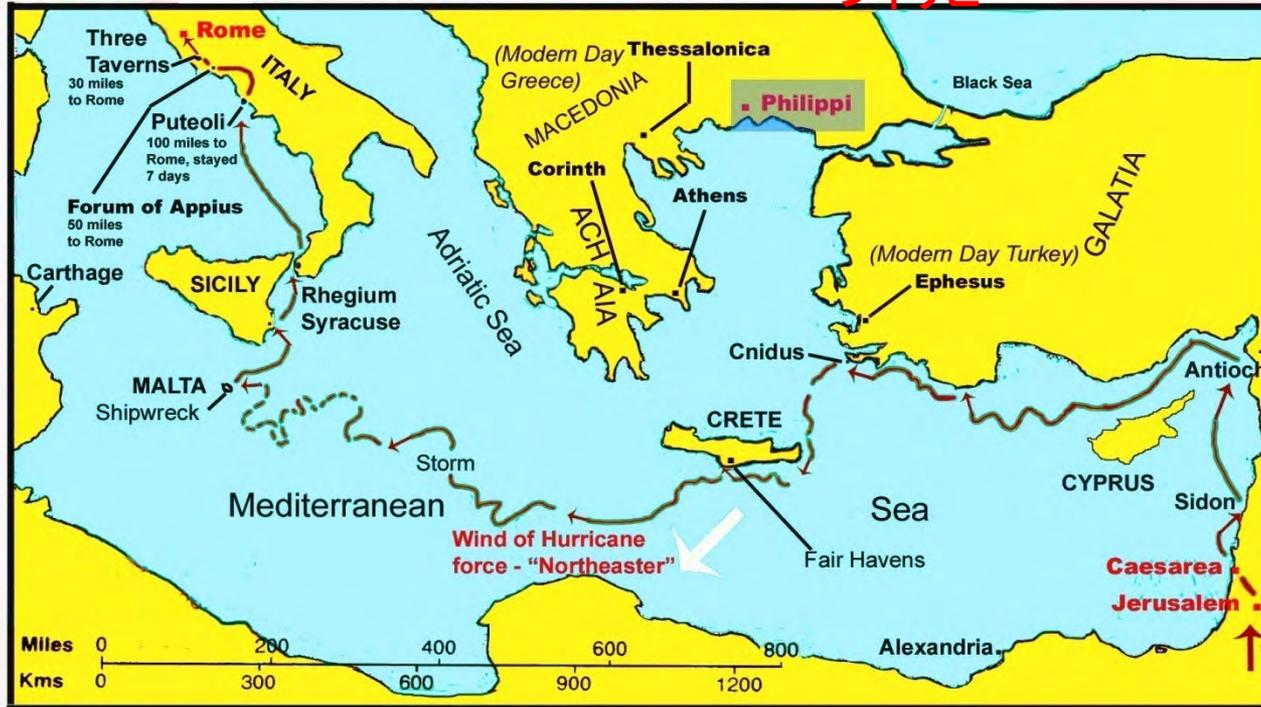


パウロの拘留された場所とローマへの旅

Places of Paul's custody and his voyage to Rome

ローマ

フィリッピ



カイサリア
エルサレム

Copyright 2003 by Central Christian Church.

- Legend
- Cities where Paul was held in custody
 - Main cities where the gospel spread

使徒16:12

そこから、マケドニア州第一区の都市で、
ローマの植民都市であるフィリピに行った。

パウロとシラスは初めてフィリピに足を踏み入れ、リディアと出会った。(使徒16:14)

ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。

使徒16:16-18

わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。

彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」

彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。

使徒16:19-21

ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。

そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。」

ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」

1. 女奴隷の主人

彼女は占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。彼女の主人は1人ではなく、複数であったことから、共同経営であったことは明らかである。共同経営体制であれば、役人に訴えた時により説得力があったことだろう。

女奴隷の主人たちが怒って、弟子達を告発した。

使徒16:20-21

そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」

ローマの法律上、この告発は深刻なものであった。

1. 町を混乱させているという告発
2. ユダヤ人の風習をローマ市民に押し付けているという告発。

2. クリスマスの指導者

- ・ 女奴隷の主人は「この者たちはユダヤ人で、ローマ帝国の市民である私たち」という表現を使ったことにより、ローマ市民はユダヤ人に対して優越感を持っていたことが分かる。
- 会堂は門の外にあった。使徒16:13
- 使徒18:12に書いてある通り、皇帝クラウディウスが間もなくユダヤ人をローマから追放する命令を下すところであった。つまりこの時点ではすでにローマ帝国内で反ユダヤ的な思いがあった。

3. 群集

- 女奴隷の主人と一緒にになってクリスチャンを責め立てた。何故なら、彼らも女奴隷の「賜物」によって利益を受けていたからである。
- 最新の特権階級意識を持ったローマの群衆は、低い地位のパウロとシラスを見下したに違いないだろう。

4. 罪の刑罰

- ローマの市民権を所有していない者が法を破った時には、必ず刑に処せられた。しかし、ローマ市民は鞭打ちから逃れることができた。
- ローマの哲学者キケロは、ガイウス・セルベリウスという人物について以下のように述べている。町を混乱させた罪がどのような刑罰に値したかが明らかにされている。

「ガイウス・セルベリウスは、激しく打たれた。その後、主任裁判官セクスティウスが可愛そうなこの男の顔を棒の硬い柄で何度も激しく打った。男は地面に崩れ落ち、顔と目から大量の出血が見られた。男は続けて叩かれ、ひれ伏して服従し、降参した時には、すでに死にかけており、その後、死亡した。」

地位が低い者には最も過酷な拘留がなされた。パウロとシラスは暴動の罪に問われ、むごい扱いを受けた。彼らが受けた鞭打ちは悲惨であった。

使徒16:33 「。。。打ち傷を洗ってやり。。。」

申命記25:2-3

もし有罪の者が鞭打ちの刑に定められる場合、裁判人は彼をうつ伏せにし、自分の前で罪状に応じた数だけ打たせねばならない。40回までは打ってもよいが、それ以上はいけなない。それ以上鞭打たれて、同胞があなたの前で卑しめられないためである。

ユダヤ人が施す鞭打ちは40回までだったが、ローマ人の鞭打ちには限界や基準は一切なかった。

使徒16:25-28

真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」

使徒16:29-34

看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」

そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。

使徒 16: 35-40

朝になると、高官たちは下役たちを差し向けて、「あの者どもを釈放せよ」と言わせた。それで、看守はパウロにこの言葉を伝えた。「高官たちが、あなたがたを釈放するようにと、言ってよこしました。さあ、牢から出て、安心して行きなさい。」ところが、パウロは下役たちに言った。「高官たちは、ローマ帝国の市民権を持つわたしたちを、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打ってから投獄したのに、今ひそかに釈放しようとするのか。いや、それはいけない。高官たちが自分でここへ来て、わたしたちを連れ出すべきだ。」

下役たちは、この言葉を高官たちに報告した。高官たちは、二人がローマ帝国の市民権を持つ者であると聞いて恐れ、出向いて来てわびを言い、二人を牢から連れ出し、町から出て行くように頼んだ。牢を出た二人は、リディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出発した。

5. パウロはローマの市民権保持者であることを最後まで明かさなかった

- ・ パウロが刑罰を受けた翌日に、自分はローマ市民権の所有者であると明かしたことは興味深い。

刑罰を逃れるためであれば、この時点で明かすことは遅すぎたのではないだろうか？

- 使徒16: 38-39によると、下役達は恐れ、わびを言い、急いで町から出てもらうようにした。i

- 「レックス・ユリアというローマの法律書によると、
- 「ローマ市民は被疑者であっても、縛られたり、またはローマで正当な裁判を受けることを妨げられることは一切禁止されていた」(*Lintott, 'Coercitio', 262*)
- 「ローマ帝国の役人であれば、ローマ市民に対して正当な裁判なしに死刑、鞭打ち、首吊り、拷問、又はそのような行動を命令することなども一切禁じられていた」(*Ulpian in Dig. 48.6.7*)
- 「役人として権限を持っている者がローマ市民に対して正当な裁判なしに死刑、鞭打ち、拷問または何かの裁きを施すことは、公然暴力の罪に問われる。ローマ市民は皇帝に対して上訴する権利がある。地位の低い役人であればこの公然暴力罪に定められると死刑を宣告されることもある。地位の高い役人であれば遠島である。」(*Sent. 5.26.1; cf. Sent 5.26.2 and discussion in Garnsey, 'Lex Julia', 173f and AN Sherwin-White, Roman Society and Roman Law in the New Testament, 58*).

パウロはローマの市民権保持者であることを最後まで明かさなかった

その理由:

- i) もしパウロがフィリピに残って、ローマ市民としての権利を訴えることになれば、テサロニケとベレアの伝道活動に遅れが生じただろう。

使徒28:30に書かれているように、上訴すれば2年間も無駄になる。この2年という期間はマケドニア州の伝道にとって、非常に貴重な時間であった。

- ii) 上訴することには金銭的な犠牲も伴った。

パウロはローマの市民権保持者であることを最後まで明かさなかった

- iii) フィリピの教会に危険が及ぶ可能性があった。もしパウロが解放されたとしても、フィリピの教会が攻撃される可能性があった。
- iv) 福音のために苦しんだとしても、続けて宣教する模範を他のクリスチャンのために示した。

フィリピ¹:29-30

つまり、あなたがたには、キリストを信じること
だけでなく、キリストのために苦しむことも、恵
みとして与えられているのです。

あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今ま
たそれについて聞いています。その同じ戦い
をあなたがたは戦っているのです。

結論：

パウロがローマの市民権保持者であることを最後まで明かさなかったのは、よく考えた上で、計算されてのことだった。パウロは自分の身の安全よりも、福音の前進をあえて選んだのだった。

使徒 16: 40

牢を出た二人は、リディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出発した。

6. 神様の御手による働き

- パウロは、どうすれば無事に解放されるかを考えてはいなかった。拘留されたことも、福音を伝える絶好の機会であると考えた。
- 私たちは神様が示してくださる「しるし」を見過ごしたり、間違えて解釈していないだろうか。人の為に開かれた扉を、自分の為の開かれた扉だと誤解していないだろうか。
- 私たちが同じ状況になったら、一緒にいる囚人たちは私達の口からどのような言葉を聞くだらうか？神を賛美する言葉か、不平不満の言葉か。

どのように神様の御手の働きを解釈しますか？

解放されるチャンスを選ぶか、
開かれた扉の中に積極的に入るか。

ディスカッションのための質問:

- ミッション、つまり福音を伝えることに関して優先順位はどれほど高いですか。
- 自分の問題や人生の思い悩み以上にミッションを大切に考えていますか。
- 地震は何の目的のために起こりましたか。パウロ達を解放させるため、あるいは看守と家族を救うためでしょうか。あなたはこの出来事をどのように理解していましたか。
- パウロとシラスではなく、牢に拘留されたのが自分であったら、同じように囚人と家族が救われることになったと思いますか。あなたがいる所々にイエスのインパクトが残りますか。
- 具体的にどのような問題や思い悩みに気が取られてミッションに集中しなくなっていますか。
- 普段から神様に対して賛美を歌いますか。周りにいる人は私達のクリスチャンとしての喜びを感じますか。またはいつも私達の口から問題について聞いてますか。

暗証聖句

使徒20:24

しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。
(新共同)